

大学生の「年をとること」に対する意識と未来展望

安藤 孝敏¹⁾

Awareness of aging and future perspectives among college students

Takatoshi Ando

目的：本研究の目的は、青年期にある大学生の「年をとること」に対する意識と未来展望との関連を検討することであった。主たる課題は「年をとること」に対する意識の構造を明らかにすることであり、続いて、「年をとること」に対する意識が大学生の未来展望に及ぼす影響について、性差を含めて検討することであった。

方法：データは大学生を対象に実施された自記式質問紙調査から得られた。調査項目は、基本属性、「年をとること」に対する意識、時間的展望であった。大学生 461 名から回答が得られ、データ・クリーニング作業の結果、有効な回答が得られた 445 名を分析対象とした。

結果：「年をとること」に対する意識の構造は、「心身の衰退」「社会的離脱」「成熟・統合」の 3 因子からなることが示された。「年をとること」に対する意識が未来展望に及ぼす影響について重回帰分析を用いて検討したところ、「成熟・統合」は男子の「目標指向性」と有意な正の関連、「社会的離脱」は男子の「希望」と有意な負の関連が認められたが、女子ではまったく関連が認められなかった。

結論：本研究の結果から、男子は、「年をとること」に関して「成熟・統合」の視点を有することで将来の目標をもつことが促進され、社会生活が制限されるという「社会的離脱」の視点は、希望を持つという未来展望を阻害することが分かった。

キーワード：年をとること、社会的離脱、成熟・統合、未来展望、大学生

青年期にある者のエイジングに対する意識は、高齢社会において多世代との共生のあり方を考えるうえで、きわめて重要な課題である。青年を対象としたエイジングにかかわる調査として主に行われてきたのは、高齢者や老いに対する意識やイメージの測定である。例えば、高橋 (2012) は超高齢社会における肯定的な「老人観」の醸成が学校教育において重要であるとし、大学生を対象に一般的な高齢者に対する「一般老人イメージ」の調査を実施している。その結果、「冷たいー暖かい」「嫌いー好き」といった情動・感情的側面では肯定的、「遅いー速い」「強いー弱い」などの機能・活動的な側面では否定的なイメージをもっていることが示された。さらに、高橋 (2013) は、大学生自身が高齢者になったときの「自己老人イメージ」についても調査を行い、大学生は「一般老人イメージ」では否定的であった日常生活における活動能力の維持が自身の将来の日常生活において不可欠な要素として捉えられていると報告している。また、大学生たちの「自己老人イメージ」の自由記述から、

¹⁾ 横浜国立大学大学院環境情報研究院

活動性に富み人間関係の豊かさに特徴づける、すなわち外部から評価可能な要素から「自己老人イメージ」を形成していると結論づけ、高齢期の自己像は女性の方が肯定的なイメージを持つ傾向があると指摘している。

一方、堀（1996）はエイジングについて、日本語では「年をとること」と「老い」の二側面が存在するとし、大学生と高齢者のその意識の違いを比較検討している。その結果、高齢者とは対照的に大学生は「年をとること」と「老い」を別の現象として捉えていることが示された。すなわち、大学生においては、「社会生活が開けていく」や「知恵や人生経験が豊かになっていく」といった肯定的ニュアンスのある項目では「年をとること」にあてはまるとする回答が多く、「老い」には少なく、反対に「体力が落ちていく」や「社会生活からはなれていく」といった否定的ニュアンスのある項目では「老い」にあてはまるとする回答が多く、「年をとること」には少なかった。堀（1996）はこの差異の原因として、回答者（大学生と高齢者）がそれぞれ自分の現在の年齢を足場にして回答をしているという点をあげている。そしてこの結果をふまえ、堀（1996）は人生の後半のプロセスを「坂を下る」ように捉えるライフ・サイクル観に疑問を投げかけ、同時に生涯教育の基盤ともいえる生涯そのものをより前向きにとらえる視点を持つことを提唱している。

「年をとること」という未来の事象を想像するにあたって重要なのは、時間的な展望を持つということであろう。「時間的展望」とは、「ある一定の時点における個人の心理的過去および未来についての見解の総体」（Lewin, 1951）であり、また、「広義には、個人の現在の事態や行動を過去や未来の事象と関係づけたり、意味づけたりする意識的な働きで、特に人生にかかわるような長期的な時間的広がり」（白井, 1997）を意味している。現代の青年の時間的展望の課題について、白井（1997）は「未来志向によって社会の進歩と個人の自立を達成しようとしたのが近代であるとするならば、現代は、その到達点を確認しつつも、手段化された現在を再度自己が生きられる時間へと引き戻すことが必要とされているのだろう」と指摘している。このことから、現代の青年は将来の自分を見据えつつも、その将来の自分と今の自分をリンクさせることが困難となっていることが考えられ、その考える力を培うことが現代の青年に対する時間的展望の教育に必要であるといえる。

白井（1997）は大学生の時間的展望について、男性よりも女性の方が肯定的な時間的思考性や時間的展望を示すと述べている。また、都筑（1999）は大学生の時間的展望について、学校から社会へと移行の時期を控え自己の生き方を真剣に考えざるを得なくなるために、長期的な時間的展望の確立が必要となると述べている。しかしながら大学生の時間的展望の一般的な傾向について、将来目標の時間的な配列は第一に余暇、第二に教育や職業、この二つが達成された後に自立や生き方が目標となる。すなわち、大学生は短期的には生活を楽しむための目標を立て、次に自らが社会から獲得を欲求される発達の課題に関連したことがらを目標とし、最後に自立や生き方についての目標を達成されることが考えられている。このようなことから「年をとること」という時間的展望は、大学生にとって優先順位の低い目標であるが必要なものであり、これからの自立や生き方について考える重要な機会になるといえる。

青年の前向きな「年をとること」に関する意識の醸造は、超高齢社会におけるエイジング教育の大きな課題であり、青年の将来展望に重要な意味を有しているといえる。宇都宮（2007）は、女子青年は自己の外見や他者評価に敏感でエイジングに対して衰退変化という印象を持っていると予想し、彼女たちを対象に「年をとること」に対する意識に焦点を当て、それが女子青年の未来展望に与える影響について検討した。その結果、「年をとること」に対する意識は、「心身の衰退」「社会的離脱」

「成熟・統合」の3因子から構成されることが示された。女子青年の「年をとること」に対する意識と未来展望（「目標指向性」と「希望」）との関連は、「社会的離脱」と「成熟・統合」に認められた。すなわち、「社会的離脱」は「目標指向性」と「希望」のどちらにも負の影響を及ぼしており、宇都宮（2007）は「年をとること」は女子青年にとって社会の場での自己実現を制御してしまうものであり、自身の未来に目を向けることを躊躇させると考察していた。一方、「成熟・統合」は未来展望のうちの「希望」にのみ正の影響が確認され、女子青年は「年をとること」に対し「成熟・統合」の視点をもつことで将来的な希望も持つことができると述べていた。また、自己の外見の加齢による変化である「心身の衰退」の未来展望への影響はみられず、女子青年が「心身の衰退」を予想するであろう高齢期と未来展望を関連づけにくかったのではないかと報告していた。宇都宮（2007）はこの研究の課題として、男子学生を含めた調査による男女比較や、他の学校段階との比較、親や祖父母との人間関係などの要因との関連をあげていた。

そこで、本研究では、宇都宮（2007）の研究対象ではなかった男子大学生を含めた調査を行い、青年期にある大学生男女の「年をとること」に対する意識と未来展望との関連を検討することを目的とした。本研究の課題は「年をとること」に対する意識の構造を検討し、「年をとること」に対する意識が大学生の未来展望に及ぼす影響について、性差を含めて明らかにすることであった。

方 法

1. データ

本研究で用いたデータは、神奈川県と東京都内の大学に通っている大学生を対象に実施された自記式質問紙調査から得られた。調査は、授業時間の最後 20 分程度を使い実施し、事前に配付した調査票に回答を求め、授業終了時に回収した。調査期間は 2017 年 12 月～2018 年 4 月であった。大学生 461 名から回答が得られ、データ・クリーニング作業の結果、有効な回答が得られた 445 名（男子 192 名、女子 253 名、年齢の範囲 18～26 歳、平均年齢 19.8±1.12）を分析対象とした。

2. 調査項目

調査項目は、基本属性、「年をとること」に対する意識、時間的展望であった。基本属性としては、性別、年齢、祖父母との同別居の状況を尋ねた。祖父母との同別居については、現在の状況とこれまでの経験の有無について回答を求め、これらの回答から高齢者（祖父母のうち少なくとも一方）との「同居経験あり」と「なし」に変換した。

「年をとること」に対する意識は、堀（1996）が Keller, Leventhal & Larson（1989）の研究を参考に作成した 20 項目を用いて調べた。具体的な項目は、「人生の残り時間がすくなくなっていく」「死に近づいていく」「人との付き合いが減っていく」「人間が完成されていく」などであった。回答は、宇都宮（2007）と同様に、「そう思う」（5 点）～「そう思わない」（1 点）の 5 件法であった。

時間的展望は白井（1994）が作成した「時間的展望体験尺度」の現実に関する下位尺度である「現在の充実感」（5 項目）、未来に関する下位尺度である「目標指向性」（5 項目）と「希望」（4 項目）を用いた。回答は「そう思う」（5 点）～「そう思わない」（1 点）の 5 件法であった。逆転項目の処理を行い、素点の合計得点を項目数で除したものを各下位尺度の得点とした。各下位尺度の得点範囲は 1～5 点であり、得点が高いほど「現在の充実感」が強く、「目標指向性」があり、「希望」を持っていることを表す。本尺度作成時の α 係数は .67～.83 の満足できる値であったと報告（白井, 1994）されてい

るが、今回の調査における α 係数は.51～.66であり、やや低い値であった。

3. 分析

「年をとること」に対する意識の構造を明らかにするために、探索的因子分析を行った。因子の構造と各因子に所属する項目を確定し、「年をとること」に対する意識の下位尺度得点を算出した。次に、「年をとること」に対する意識および「現在の充実感」と未来展望との関連性を検討するために、「年をとること」に対する意識の下位尺度得点と「現在の充実感」を独立変数、「目標指向性」および「希望」を従属変数とする一括投入による重回帰分析を実施した。「現在の充実感」を独立変数として投入したのは、白井（1994）が報告している下位尺度間の相関係数からも明らかのように、「目標指向性」と「希望」といった未来展望は現実の生活がいかにか充実しているかによって影響を受けることが予想されたからである。なお、男女で関連性に違いがあると考えられたので、全体に加えて男女別に重回帰分析を実施した。最後に、「年をとること」に対する意識の下位尺度得点の高低や相互の関連性は個人で異なると考えられたので、回答した大学生をグルーピングするために、下位尺度得点を z 得点に変換し、Ward法によるクラスター分析を実施した。さらに、各クラスターにおける未来展望の特徴を把握するために、クラスター間で「目標指向性」と「希望」に差異がみられるかを分散分析により検討した。

4. 倫理的配慮

調査への協力は回答者の自由意志であり、回答しなくても不利益などを被ることはないこと、回答は無記名であり、統計的に処理され、調査結果から個人が特定されることはないこと、研究目的以外に利用することがない等を調査票に記載するとともに事前に説明し、調査票の提出をもって同意したものとみなした。

結 果

1. 「年をとること」に対する意識の構造

「年をとること」に対する意識の構造を明らかにするために実施した探索的因子分析（主因子法・バリマックス回転）の結果、固有値の減衰状況と解釈のしやすさから、最適解は3因子と考えられた。20項目のうち、いずれの因子にも.35未満の因子負荷量を示した5項目、複数の因子に.35以上の因子負荷量を示した3項目を除き、再度、同様の因子分析を実施した結果が表1である。

第1因子は「死に近づいていく」「健康状態が悪くなっていく」「体力が落ちていく」などの項目で因子負荷量が高く、「心身の衰退」因子とした。第2因子は「人との付き合いが減っていく」「社会生活からはなれていく」などの項目で因子負荷量が高く、「社会的離脱」因子とした。そして第3因子は「人間が完成されていく」などの項目で因子負荷量が高く、「成熟・統合」因子とした。各因子に所属する項目の内的整合性を調べるために α 係数を算出したところ、「心身の衰退」因子では.813、「社会的離脱」因子では.692、「成熟・統合」因子では.746であり、各因子の項目数から判断しても、これらは十分に高い値であった。

以上の探索的因子分析の結果から、3因子の下位尺度得点はそれぞれの項目への回答を単純合計（因子負荷量が負の値であった項目は逆転処理）し、それを項目数で除したものとした。各因子の下位尺度得点の相関は表2のとおりであった。「社会的離脱」と「心身の衰退」（ $r=.415, p<.01$ ）および

「成熟・統合」($r=-.230, p<.01$)に相関が認められたが、「心身の衰退」と「成熟・統合」の間には相関が認められなかった。男女で各因子の下位尺度得点に差異がみられるかを検討したが、いずれも差異が認められなかった。

表1 「年をとること」に対する意識の因子分析結果^{a)}

	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	共通性
「心身の衰退」因子 ($\alpha=.813$)				
人生の残り時間がすくなくなっていく	.771	.111	-.020	.607
死に近づいていく	.724	.109	-.058	.539
健康状態が悪くなっていく	.643	.239	-.022	.471
体力が落ちていく	.566	.154	-.028	.345
記憶力が悪くなっていく	.564	.275	-.090	.402
人生を振り返るようになっていく	.493	.142	.136	.282
「社会的離脱」因子 ($\alpha=.692$)				
人との付き合いが減っていく	.121	.724	-.072	.544
いろいろな人と付き合いようになる	-.124	-.632	.269	.487
社会生活からはなれていく	.288	.495	.024	.328
ただ同じような日々の繰り返し	.207	.426	-.080	.231
「成熟・統合」因子 ($\alpha=.746$)				
人間が完成されていく	-.005	-.074	.831	.696
より自分らしくなっていく	-.003	-.177	.695	.514
因子寄与	2.60	1.59	1.29	5.45
寄与率 (%)	21.41	13.22	10.75	45.38

a) 因子分析は主因子法, バリマックス回転

表2 「年をとること」に対する意識の下位尺度得点の相関係数

	心身の衰退	社会的離脱
社会的離脱	.415**	
成熟・統合	-.055	-.230**

** $p<.01$

2. 「年をとること」に対する意識と高齢者との同居経験

高齢者との同居経験は、「高齢者との同居経験あり」が150名、「高齢者との同居経験なし」が281名であった。高齢者との同居経験の効果を検討するために一要因分散分析を実施したところ、表3に示したように、「社会的離脱」($F=5.66, p<.05$)で高齢者との同居経験の有無による主効果があり、高齢者との同居経験がない者で「社会的離脱」の得点が高かった。

3. 「年をとること」に対する意識および現実の充実度と未来展望との関連

表4には重回帰分析の結果を示してある。いずれのモデルにおいても重相関係数は有意であった。「目標指向性」では、男女および全体で「現在の充実感」（それぞれ $\beta = .148, p < .05$; $\beta = .141, p < .05$; $\beta = .145, p < .01$ ），男子および全体で「成熟・統合」（それぞれ $\beta = .194, p < .01$; $\beta = .145, p < .01$ ）と有意な正の関連が認められた。また、「希望」については、男女および全体で「現在の充実感」（それぞれ $\beta = .500, p < .01$; $\beta = .462, p < .01$; $\beta = .475, p < .01$ ）と有意な正の関連，男子および全体で「社会的離脱」（それぞれ $\beta = -.203, p < .01$; $\beta = -.145, p < .01$ ）と有意な負の関連が認められた。

表3 「年をとること」に対する意識と高齢者との同居経験

	高齢者との同居経験あり (n=150)	高齢者との同居経験なし (n=281)	分散分析 F 値
心身の衰退	3.92±0.65 ^{a)}	4.04±0.66	3.24
社会的離脱	2.91±0.74	3.09±0.77	5.66*
成熟・統合	3.24±0.92	3.09±0.93	2.43

a) 数値は平均値±標準偏差

* $p < .05$

表4 「年をとること」に対する意識と未来展望の関連：重回帰分析結果

	未来展望：目標指向性			未来展望：希望		
	男性 (n=192)	女性 (n=253)	全体 (n=445)	男性 (n=192)	女性 (n=253)	全体 (n=445)
心身の衰退	.013 ^{a)}	.084	.055	.029	-.054	-.014
社会的離脱	-.082	-.077	-.071	-.203**	-.087	-.145**
成熟・統合	.194**	.105	.145**	.045	.002	.025
現在の充実感	.148*	.141*	.145**	.500**	.462**	.475**
重相関係数	.279**	.213*	.240**	.560**	.491**	.517**
自由度調整済み R ²	.058	.030	.049	.299	.229	.261

a) 数値は標準偏回帰係数 (β)

* $p < .05$ ** $p < .01$

4. 「年をとること」に対する意識の類型化

クラスター分析の結果，解釈可能性の観点から，4つのクラスターが最も適切な分類であると考えられた。各クラスターの特徴は図1に示すとおりである。第1クラスター (n=140) は「心身の衰退」と「社会的離脱」といった否定的側面が高い群であった。第2クラスター (n=81) は肯定的側面である「成熟・統合」が低い群であった。第3クラスター (n=116) は「社会的離脱」が低く、「成熟・統合」が高い群であった。そして第4クラスター (n=108) は、「心身の衰退」と「社会的離脱」といった否定的側面が低い群であった。なお、各クラスターの男女の割合には差異がみられなかった。

4つのクラスター間で未来展望である「目標指向性」と「希望」に差異がみられるかを検討したところ，表5に示すとおりであり，「目標指向性」については差異 (F=4.76, $p < .01$) が認められ，「希望」については差異が認められなかった。多重比較 ($p < .05$) の結果，「目標指向性」では第3クラスターが第1・2・4クラスターよりも高得点であった。

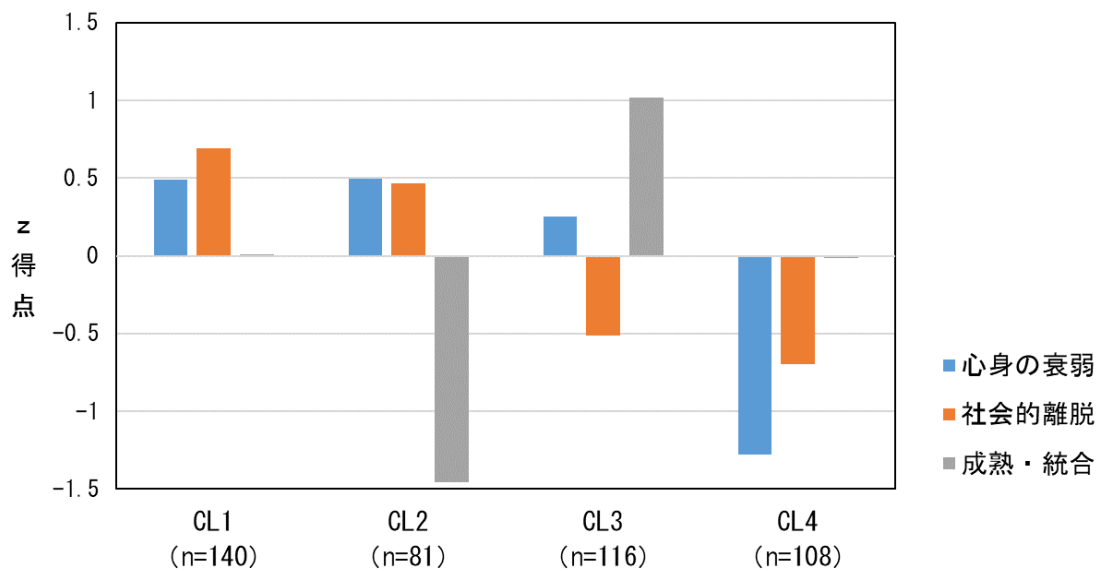


図1 各クラスターの特徴

表5 各クラスターの未来展望の平均値と分散分析結果

	CL1	CL2	CL3	CL4	分散分析結果	
					F 値	多重比較
目標指向性	2.98±0.79 ^{a)}	2.85±0.88	3.23±0.80	2.91±0.71	4.76**	CL3>CL1・CL2・CL4
希望	3.07±0.70	3.04±0.92	3.24±0.79	3.27±0.72	2.42	

a) 数値は平均値±標準偏差

** $p < .01$

考察

本研究では、宇都宮（2007）の研究対象ではなかった男子大学生を含めた調査を行い、青年期にある大学生男女の「年をとること」に対する意識の構造を分析し、「年をとること」に対する意識が未来展望に与える影響について詳細に検討した。

「年をとること」に対する意識の構造は、宇都宮（2007）の報告と同様に、「心身の衰退」「社会的離脱」「成熟・統合」の3因子からなることが示された。「心身の衰退」は「健康状態が悪くなっていく」「体力が落ちていく」などの基本的に個人内で生じる事象である。「社会的離脱」は、「人との付き合いが減っていく」「社会生活からはなれていく」といった個人と社会の相互作用を表す事象である。「成熟・統合」は「より自分らしくなっていく」「人間が完成されていく」といった加齢とともに人間的な成長を遂げてくといった内容であった。「心身の衰退」と「社会的離脱」は何かを失ったり出来なくなったりするといった、青年期の者には否定的であると思われる加齢変化であり、一方「成熟・統合」は前向きな加齢変化を示す肯定的な内容であった。

否定的変化（「心身の衰退」「社会的離脱」）については個人レベルに関する項目と相互作用レベルに関する項目で因子が分かれていたのに対して、肯定的変化（「成熟・統合」）については一つの因子に集約されていた。この結果から、青年にとって「年をとること」に対する否定的変化は外部から評価可能であり、具体的な内容がイメージしやすいと考えられる。またその一方で、「成熟・統合」に

については、個人レベルの事象と相互作用レベルの事象が複雑に絡み合っ、分けることができない関係にあること、加えて、外部からの評価がやや難しいことを示唆するものと考えられる。このことに関して、3因子の下位尺度得点の相関関係をみてみると、「成熟・統合」と「社会的離脱」の間に有意な負の相関が認められ、「成熟・統合」と「心身の衰退」との間には相関が認められなかったことから、「成熟・統合」は相互作用レベルの要素を多く含む可能性が指摘できるだろう。

3因子の下位尺度得点を高齢者との同居経験の有無で比較したところ、否定的変化である「社会的離脱」において、高齢者との同居経験がない者で有意に得点が高かった。宇都宮（2007）が行った女子青年を対象とした研究では、高齢者と関わる機会が多いほど「年をとること」の否定的側面が強く認知されると説明されていた。しかし、本研究では高齢者との同居経験がなく、日々の生活の中で高齢者と関わる機会が少ないと思われる者ほど、社会的な関わりにおいて否定的な印象が焦点化されやすいということが示された。ここ数年、急速な高齢化の進展とともに、高齢化がより問題視されるようになり、テレビなどのメディアで高齢者の否定的なニュースが取り上げられることも増えたため、高齢者との関わりが少なく、高齢者との距離が遠い青年にとって、「年をとること」の社会的交流の否定的側面を強化することに繋がってしまった可能性も否定できない。

「年をとること」に対する意識と「現在の充実感」を独立変数とする重回帰分析を行ったところ、未来展望への影響に関して性差がみられた。「成熟・統合」は男子の「目標指向性」と有意な正の関連があり、女性では関連がなかった。この結果は、「年をとること」に対し、男子は「成熟・統合」の視点を有することで将来の目標をもつことが促進されるが、女性はそのようなことではないということである。これから社会に出ていく大学生にとって、特に男子は「成熟・統合」にみられる自己の成長や広がり将来の目標になりうるものと考えられる。これに対して、女子については、結婚や子育てなどの要因も大きく関係してくるため、「成熟・統合」の強調により将来の目標が大きく促進されることはないのかもしれない。「社会的離脱」は男子の「希望」と有意な負の関連があり、女性では関連がなかった。この結果は、年をとることにより社会生活などの諸活動が制限されるようになることを考えることは、特に男子において希望を持つという未来展望を阻害する可能性があることを示唆している。

「年をとること」の否定的側面である「心身の衰退」と未来展望の関連は、男女ともに本研究ではみられなかった。これは、平均寿命が伸展して長生きできるようになった現在、「心身の衰退」について考える時、より高齢になった時点を想定してしまうため、20歳前後の大学生にとっては自身の未来展望と繋げにくいことが原因ではないかと考えられる。今後、青年期を対象とした心身の加齢による変化を研究する際にはライフステージを指定するなど調査内容の検討が求められるだろう。

「年をとること」に対する意識の下位尺度得点を用いてクラスター分析を行い、回答者を4つのクラスターに分けることができた。各クラスターの特徴は、下位尺度得点のz得点の正負の値から、肯定的変化と否定的変化のいずれが優位であるのかで説明できるものであった。すなわち、相対的に否定的変化が優位なタイプ（CL1）、否定的変化が優位なタイプ（CL2）、相対的に肯定的変化が優位なタイプ（CL3）、肯定的変化が優位なタイプ（CL4）である。各タイプの人数分布は、相対的に否定的変化が優位なタイプが140名と最も多く、次に相対的に肯定的変化が優位なタイプが116名、そして否定的変化が優位なタイプ108名、最も少ないのは肯定的変化が優位なタイプ81名であった。全体として「年をとること」は否定的な変化であると考えられる大学生（56%）が半数を超えており、今後のエイジング教育によって「年をとること」に対して肯定的見解を持たせることが求められるといえよう。

4つのクラスター間で未来展望を検討したところ、「目標指向性」において相対的に肯定的変化が優位なタイプであるCL3の得点が他の3つのクラスターより有意に高かった。「年をとること」の肯定的変化の中でも、「成熟・統合」という意識を強く持つことは、青年の将来への目標を方向づけ、より明確にさせることができると考えられる。

近年、大学生と高齢者の交流がニュース番組で特集されたりネット記事に取り上げられたりして、注目されている。例えば、同じ地域に存在する老人ホームと大学の定期的な交流イベントや、地方の大学生が高齢者宅に下宿する異世代ホームシェアなどがあげられる。本研究において、高齢者と交流（同居経験）の有無が「年をとること」に対する意識を左右することが示唆されたが、高齢者と大学生の交流機会が増えることはそれまで高齢者と交流機会がなかった青年の「年をとること」に対する意識にプラスの影響を与えることができるといえよう。また、エイジング教育の一環として高齢者疑似体験も広まっている。このような取り組みはステレオタイプな高齢者像を植えつけないように配慮して行われれば、青年が現在の自分と高齢期を結びつけることで自身がエイジングの過程にいるということを理解させることができるだろう。そして、青年たちの未来展望と自身の高齢期を結びつけることに繋がるだろう。

本研究では、青年期にある大学生男女の「年をとること」に対する意識の構造を明らかにすることはできたが、「成熟・統合」の因子に所属する項目が当初の想定よりも数が少なく、2項目になった。それでも一定程度の信頼性は担保できたが、下位尺度得点の安定性にやや問題があると思われる。若年層にも理解しやすい項目内容の表現について工夫する必要があるだろう。また、「年をとること」に対する意識が未来展望に与える影響について検討したが、女子ではまったく関連が認められなかった。これに加えて、高齢者との同居経験の影響についても、宇都宮（2007）の知見とは異なる部分があった。これらの知見の差異について、詳細に検討することが必要であろう。

本研究は、2017年度卒業生、津崎光さんの卒業研究にデータを追加して再分析したものである。津崎光さんにご協力いただき、心から御礼申し上げます。また、本研究の調査にご協力いただいた大学生の方々にも感謝申し上げます。

文 献

- 堀薫夫 1996 大学生と高齢者の老いと死への意識の構造の比較 大阪教育大学大学紀要・第IV部門, 2, 185-197.
- Keller, M.L., Leventhal, E. A., & Larson, B. 1989 Aging: The lived experience. *International Journal of Aging and Human Development*, 29, 67-82.
- Lewin, K. 1951 *Field theory in social science: Selected theoretical papers*. New York: Harper and Brothers. (レヴィン K. 猪股佐登留 (訳) 1979 社会科学における場の理論 (増補版) 誠心書房)
- 白井利明 1994 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65, 54-60.
- 白井利明 1997 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房 東京
- 高橋一公 2012 将来像としての「老人観」の測定 (1) — 一般的老人イメージの SD 法とテキストマイニングの可能性 — 東京未来大学研究紀要, 5, 92-98.
- 高橋一公 2013 大学生の老人イメージ測定の試み— 自己老人イメージの SD 法とテキストマイニングによる分析を通じて — 東京未来大学研究紀要, 6, 85-94.
- 都筑学 1999 大学生の時間的展望— 構造モデルの心理学検討 — 中央大学出版部 東京
- 宇都宮博 2007 女子青年の「年をとること」に対する意識と未来展望 立命館人間科学研究, 15, 1-8.

Awareness of aging and future perspectives among college students

Takatoshi Ando

Research Institute of Environment and Information Sciences, Yokohama National University

Objectives : The purpose of this study was to investigate correlations between the awareness of aging and future perspectives among college students. First, the structure of consciousness of aging was examined. Next, the effects of this awareness on college students' future perspectives were examined by considering gender differences.

Methods : A self-administered questionnaire was conducted with college students. Survey items included basic attributes, the awareness of aging, and the time perspectives. Valid responses (n=445) from a total of 461 were analyzed after data screening.

Results : The results indicated the structure of awareness of aging consisted of three factors, "physical/mental decline," "social disengagement," and "maturity/integrity." Effects of this awareness on future perspectives were examined using multiple regression analysis, which indicated a significant positive correlation between maturity/integrity and "goal orientation" and a significant negative correlation between social disengagement and "hope" in male college students. There were no correlations in female college students.

Conclusions : The results indicated that having a maturity/integrity perspective when perceiving aging facilitated future goals in male college students. On the other hand, to have a viewpoint of social disengagement inhibited the future perspectives of hope.

Key words : awareness of aging, social disengagement, maturity/integrity, future perspectives, college students